

メアリ・シェリーの『ヴァルパーガ』  
における歴史とロマンス

細 川 美 苗

---

松 山 大 学  
言語文化研究 第33巻第1号（抜刷）  
2013年9月

Matsuyama University  
Studies in Language and Literature  
Vol. 33 No. 1 September 2013

# メアリ・シェリーの『ヴァルパーガ』 における歴史とロマンス

細 川 美 苗

\* 本論は2010年12月4日に東京大学で行われた第19回日本シェリー研究センター大会におけるシンポジウム、「『ヴァルパーガ』を読む」にて、パネリストとして同タイトルで発表した内容である。シンポジウムは三人の発表者で構成され、司会とレスポンスが平井山美氏であり、同氏のレスポンスは、「ロマンスとしての『ヴァルパーガ』-「雑草が生い茂る囲い地」の物語」であった。もう一人のパネリストである鈴木里奈氏は、「*Valperga* における社会革命思想の考察：Euthanasia と Beatrice の敗北と死から」を発表した。

本稿は、シンポジウムに際して他の二人の発表者に配布した発表用原稿を修正したものである。

## 歴史とロマンス

1823年に出版された *Valperga: or, the Life and Adventures of Castruccio, Prince of Lucca* (『ヴァルパーガ、またはルッカの王子、カストルッチオの生涯』(以下『ヴァルパーガ』)) は、ある程度の長さがあるものとしては、メアリ・シェリー (Mary Shelley 1797-1851 以下シェリー) の第2作目の小説である。イギリスのマーロウにて『フランケンシュタイン』(*Frankenstein* 1818) を執筆中であった1817年ごろに、夫であるパーシー・シェリー (Percy Bysshe Shelley 1792-1822) と共に読んだマキャベリの手による『カストルッチョ・カストラカーニ伝』の英訳から、シェリーは『ヴァルパーガ』の着想を得たとス

テュワート・カラン (Stuart Curran) は指摘している (103)。完成は着想から4年後の1821年である。シェリーは父親であるウィリアム・ゴドウィン (William Godwin 1756-1836) による修正を受け入れ、1823年2月に小説は出版された。その前年である1822年に、夫パーシー・シェリーは滞在先のイタリアで溺死している。

『ヴァルパーガ』の「プレフェス」において、シェリーは興味深いことを述べている。それは、以下の引用に見られるように、1520年に書かれたマキャベリの『カストルッチョ・カストラカーニ伝』を「ロマンス」だと断言し、本当の出来事の詳細は、『ヴァルパーガ』執筆にあたって自分が参考にしたシスモンディ等の記述にあると述べていることだ。

The accounts of the Life of Castruccio known in England, are generally taken from Macchiavelli's romance concerning this chief. The reader may find a detail of his real adventures in Sismondi's delightful publication, *Historire des Republiques Italiennes de l'Age Moyen*. In addition to this work, I have consulted Tegrino's Life of Castruccio, and Giovanni Villani's Florentine Annals. (Shelley iii)

このような発言は、マキャベリの記述に対して、『ヴァルパーガ』に書かれたカストルッチョの生涯の歴史的正確さを主張しているように見える。

確かに、マキャベリの『カストルッチョ・カストラカーニ伝』は、多くの部分がマキャベリの創作であり、歴史的な記述とは言い難い。たとえば、カストルッチョは捨て子であるなど、事実の客観的な記述という観点からは歴史とは言えないだろう。しかし、永井三明によれば、マキャベリの時代の書き物において、それは一般的なことであったようだ。

ルネサンス期の歴史家は、対象となる人物の個性の正確無比な提示をする

つもりもないし、あるいは又、歴史上の人物の言動を正確に描写することではなくて、その主要任務は、指導者、会戦、弁論についての一般的な知識を与えることであった。また資料となる証拠が利用できなければ、捏造することも許された。…対象となる人物がいかなる人格を持つものであるのかということよりも、英雄崇拜の対象になるかどうかということであった。軍人はつましく敬虔なタイプとしてえがかれ、多難だった生涯は理想化されヒロイズムの外見のもとで消し去られる。(永井 359)

つまり、主人公カストルッチオの人格、個性、内面性には無関心であり、領土拡大と権力掌握を極めた人物の一つの模範を描くのが、マキャベリの目的であったといえる。

しかし、マキャベリの著作を『ロマンス』であると断言し、それに対して、『ヴァルパーガ』は「本当の」出来事に依拠していると主張するシェリーの言い分を鵜呑みにすることはできない。なぜなら、小説にはロマンス的な要素が多分に含まれているからだ。さらに、小説が事実に基づくと述べている「プレフェス」の言い分を打ち消すかのように、物語の結末では、それまでの記述が「私的な記録」に基づいて書かれたと述べている。また、小説の書名も、架空の土地であるヴァルパーガという名前と、歴史上の人物カストルッチオの並置である。ここに見られるロマンスと歴史の拮抗が、この小説のひとつの特色といえるだろう。

## 歴 史 小 説

前節で述べた、『ヴァルパーガ』におけるロマンスと歴史のジャンルの比肩を、当時流行していた小説のスタイルという側面から考察したい。なぜなら、当時歴史を題材にした小説が大流行していたからである。

まず、歴史に対する概念としての小説／ロマンスの關係に目を移したい。小

説とロマンスの区別は当時厳密なものでなく、現在でもはっきりと作品群をそれぞれのジャンルに分類することは難しいだろう。オックスフォード版文学必携(Birch)によると、「ロマンス」とは叙事詩と対をなす平易な散文スタイルの書きもので、伝統的にはアーサー王伝説、シャルルマーニュと騎士たち、古典ヒーローを主題とするが、17世紀以降は恋愛に主眼を置いた小説を広く指すと考えられるということである。また「ロマンス」の特性は、叙事詩に対立する叙情性、すなわち内面描写とすることができる。上記の一般的な分類を踏まえて、本論においてロマンスといった場合の特性を、歴史に対する虚構であり、恋愛を巡る筋で、多分な内面描写を伴うものと位置付けたい。

上記のような小説／ロマンスが、19世紀初頭に歴史的な枠組みの中で展開することで、歴史小説といわれるジャンルが確立した。その立役者は、1814年から1832年にかけて出版されたウォルター・スコット(Walter Scott 1771-1832)のウェイヴァリー小説である。

ゲアリ・ケリー(Gary Kelly)によれば、スコットのウェイヴァリー小説は、歴史に翻弄される個人や、あらゆる社会階層の栄枯盛衰のドラマに焦点を当てて、読者の当時に至る歴史を描いている。スコットランドの併合、革命期の英国やジャコバイト運動といった、読者が政治的な関心を共有できる歴史的出来事を舞台にして、その歴史に翻弄される個人を描いている。ウェイヴァリー小説の読者は、主人公とともに過去を体験し、因果性のある物語として歴史を受け入れるようになる。ケリーによれば、そのような体験において、国家の歴史の一部であるという自己意識が形成され、その延長に英国のナショナル・アイデンティティーさえもが構築されたのだ。1745年スコットランドにおけるジャコバイト反乱を舞台とした『ウェイヴァリー』において、物語最後に描かれる主人公エドワードと義父ファークスの肖像について、金津和美は以下のように述べている。

[肖像画は] 失われたジャコバイトの過去を敬愛を込めて表象するもので

ある。かくして、現実の紛争の歴史は、装飾的な記号として転化され、風景美の中に回収されるのであり、タリー・ヴィオランのピクチャレスクな自然は、エドワードとローズの結婚に見られるような、イングランドとスコットランドの統合によって生まれる新しい秩序と繁栄の象徴となるのである。…スコットランドを舞台としたエドワードの精神の旅もまた、同じ行程をたどり、新しい英国国家アイデンティティーをより自然で、必然的な美德として確認し、獲得する旅となるのである。(金津 136)

読書行為において主人公の旅を追体験する読者も、小説が示す英国国家アイデンティティーを自然と受け入れるのだ。

また、オックスフォード版文学必携 (Birch) によると、スコットの歴史小説の流行は、当時は女性の読み物とされていたロマンスに、歴史的な要素を取り込み男性化したという経緯も持つ。ロマンスと女性の結びつきは、物語の世界と現実を区別できない若い女性という否定的なステレオタイプが存在したこと由来する。そのステレオタイプとは、ロマンスなどの現実にはありえそうにない話を読みふけり、そこで得た世界観を基準に現実世界を判断することで、滑稽な行動をしてしまう女性たちである。そのようなステレオタイプは、18世紀中盤にはシャーロット・レノックス (Charlotte Lennox 1730-1804) の『女キホーテ』 (The Female Quixote 1752)、19世紀においてもジェイン・オースティン (Jane Austen 1775-1817) の『ノーサンガー・アベイ』 (Northanger Abbey 1818) などに登場している。つまり、非現実的であり有用ではない空想話であるロマンスは、女性の読み物として軽蔑されていたのだ。

ロマンスに対して、歴史は有用で男性的な読み物として理解されていた。ロマンスと歴史は、女性的なものと男性的なもの、感情と理性などの二項概念と重ね合わせて理解できるものであり、女性的で軽蔑されるロマンスや小説と、紳士の読み物である歴史という風に受け取られていたと大まかに考えて差し支えない。小説／ロマンスと歴史の融合が18世紀後期以降重要視された事実に

ついて、マイケル・ロッシントン (Michael Rossington) も以下のように述べている。ここで彼は、ロマン主義時代においては、小説における歴史的事実の詳細の正確さが文学的功績の尺度となっていたと指摘している。

In the Romantic period, the outstanding commercial success of the poetry of Byron and the novels of Scott testified the fact that accuracy of historical detail in fiction was considered a measure of literary achievement. (Rossington, Introduction, x)

シェリーが「プレフェス」において『ヴァルパーガ』の歴史性を強調するのは、以上のような歴史とロマンスについての一般的な考えをくみ取ってのことだろう。『ヴァルパーガ』は、金銭的に困窮していた父親を救うために書かれたという背景もあり、シェリーがプレフェスで、『ヴァルパーガ』の歴史的な正確さを強調するのは、「幼少期から出版業界に接してきたメアリが、出版市場についての分別ある感覚を持っていたことは否めない」(106)と言うカランの指摘は的を射ている。*The British Magazine* はその好意的な書評の中で、『ヴァルパーガ』をスコットの『ウエイヴァリー』と比較している。夫パーシー・シェリーもまた、チャールズ・オリエールにあてた手紙の中で、『ヴァルパーガ』をウエイヴァリー小説の「宿家主の物語」(Tales of My Landlord) シリーズと比較している (Clemit 176)。シェリー自身もスコットの歴史小説を多く読んでいた<sup>1)</sup>。

しかし、すでに述べたように、『ヴァルパーガ』においては、ロマンスに対する歴史の優位性が一貫して保たれているわけではない。表向きは歴史的な正確さを尊重している体のもと、シェリーが重視しているのはロマンスではないかと考えるのが、本稿の目的である。以下の部分では、『ヴァルパーガ』における歴史とロマンスの関係に目を転じたい。

## 歴史的人物としてのカストルッチオ

本節では、『ヴァルパーガ』における歴史の部分、つまりカストルッチオに目を向けたい。そうすることで、女性登場人物達との比較において、『ヴァルパーガ』ではカストルッチオの内面への考察が少なく、そのような視点を軽視した、歴史的な人物として彼が扱われていることを確認したい。

『ヴァルパーガ』は、カストルッチオの歴史と、彼をめぐる二人の架空の女性の恋愛物語という二つの軸を持っていることから、歴史記述でありながら、カストルッチオを思う二人の女性の内面を描いている。これについてジェームズ・カーソン (James Carson) は、『ヴァルパーガ』を、「感情が出来事である新種の歴史小説の典型である」(186) と評価し、*Historical Novel of Sensibility* (168) という新ジャンルであると位置づけている。カストルッチオという偉人の生涯という歴史的な題材を扱いながら、彼を巡る架空の女性達とのロマンスを織り込んでいる点から、『ヴァルパーガ』が、歴史とロマンスの二つのジャンル混交した小説であることが分かる。

女性たちのうち一人は、架空の土地「ヴァルパーガ」の城主であり、カストルッチオの婚約者ユーサネイジアで、もう一人はカストルッチオが墮落させる少女ベアトリーチェである。この二人の女性登場人物はそれぞれフェア／ダーク・ウーマンの典型であり、ともにカストルッチオを愛する。二人の女性は、ライバルとして描かれるよりはむしろ、カストルッチオの犠牲者として、友愛の情で結ばれてゆく点が特色である。これらの女性の典型や、ダンテその他を網羅するキャラクター形成の詳細については、すでに阿部美春と市川純が詳しく論じている。

ユーサネイジアとベアトリーチェは、それぞれ、一つのチャプターほとんどすべてを、直接法を用いて自己の内面描写に費やす機会を持っている。それは、カストルッチオとの恋愛を軸に、激しく動揺する内面を告白する機会となる。

一方、小説内でカストルッチオが内面を詳細に語ることはほとんどない。彼

の感情が引き裂かれている可能性を、幾度か語り手が示唆することはあるが、それをカストルッチオ本人がどれほど自覚していたのかは読者には不明である。この点から、『ヴァルパーガ』において、女性登場人物は内面性を重視したロマンス風の描写をされており、主人公カストルッチオは歴史に描かれるような扱いをうけているといえる。つまり彼の業績を示すことが、彼の内面の考察よりも重視されているのだ。

カストルッチオの行く末は、小説の早い段階で読者に示される。3巻、300ページ以上ある小説の50ページにも至らない部分で、カストルッチオの将来は語り手により示される。彼はその後ほとんど変化しない、平板な登場人物である。以下は、元ミラノの暴君であり、現在は傭兵として従軍しているスコト将軍のもとで、軍人としての生き方を身につけるカストルッチオの様子である。

Towards the close of the winter he returned to the camp of Scoto, in whose esteem he held a very high place. This general delighted in imparting his experience to so attentive a listener, and in endeavouring to form the genius of one who he foresaw would rise to the highest rank among the lords of Italy. Castruccio was admitted at all hours to his tent; they rode together; and, under the precepts of one well experienced in the politics of Italy, Castruccio began to understand and meditate the part he should act, when he returned to that country. Yet Scoto's was an evil school; and, if his pupil gained from him a true insight into Italian politics, he at the same time learned the use of those arts which then so much disgraced that people. The Punica fides had been transferred across the Mediterranean; and every kind of wile and artifice was practised in the Italian palaces, which ever received from the court of the Popes, as from a well of poison, courtier and crafty politicians, who never permitted the art to fail for want of instructors. Scoto had been more

successful than any other in the exercise of this policy and he now initiated Castruccio in the secrets of the craft. Hitherto his mind had been innocence, and all his thoughts were honour. Frankness played on his lips; ingenuousness nestled in his heart; shame was ever ready to check him on the brink of folly; and the tenderness of his nature seemed to render it impossible for him to perpetrate a deed of harshness or inhumanity. The court of England had infused some laxity into his moral creed; but at least he had not learned there hypocrisy, and the wily arts of a hoary politician. Still the strait path of honour and a single mind had ever engaged his choice. But nineteen is a dangerous age; and ill betides the youth who confides himself to a crafty instructor. If Castruccio listened at first with an inattentive ear to the counsels of Scoto, yet their frequent repetition, and the wax-like docility of his mind, quickly gave them power over him. (Shelley 42-43 イタリクス原文 強調加筆)

カストルッチオはスコトの元で、残虐で狡猾な策士の才能を身に着け、その性質は固着する。その後、カストルッチオは女性登場人物たちの交友から、彼の気質をより人間的なものに成長させる機会に接する。その際、読者も主人公の成長を期待する。ところが、彼はそのような場合には、決まって素早くその場を立ち去り、感情的なジレンマに直面することを避ける。カストルッチオは、最後まで人間的な成長を見せることはなく、冷酷な決断で軍人として成功を手にする。彼の内面を知ることができない読者は、歴史的偉人である主人公カストルッチオに、共感することはできない。カストルッチオの内面へと深く入り込まない語りは、カストルッチオの人物像を、身勝手に同情の余地のない、平板な暴君像へ仕立てている。

カストルッチオはユーサネイジアと将来を約束しながら、17歳のベアトリーチェを誘惑する。そして、簡単にベアトリーチェを捨てて故郷であるルッ

カに戻る。以下の引用部分では、ベアトリーチェの元を立ち去る際のカストルッチオの様子が描かれている。ベアトリーチェはすぐに自分を忘れるだろう。そして、自分が留まることの方が、彼女には都合が悪いのだと自分に言い聞かせるものの、自らの行為を恥じているかのような描写が続く。その途端に、カストルッチオは別の用事を思い出して、そちらに向かい、それ以上自分の行為を内省することはない。

... Beatrice had never demanded his faith, his promise, his full and entire heart ; but she believed that she had them, and the loss sustained by her was irretrievable.

Yet she would soon forget him : thus he reasoned ; hers was one of those minds ever tossed like the ocean by the tempest of passion ; yet, like the ocean, let the winds abate, and it subsides, and quickly again becomes smiling. She had many friends ; she was loved, nay, adored, by all who surrounded her : utter hopelessness of ever seeing him again would cause her to forget him ; her old ideas, her old habits would return, and she would be happy. His interference alone could harm her ; but she, the spoiled child of the world, would weep out her grief on some fond and friendly bosom, and then again laugh and play as she was wont.

He spent the following day and night among these forests ; until the tempest of his soul was calmed, and his thoughts, before entangled and matted by vanity and error, now flowed loose, borne on by repentance, as the clinging weeds of a dried-up brook are spread free and distinct by the re-appearance of the clear stream. He no longer felt the withering look of Beatrice haunt even his dreams ; it appeared to him that he had paid the mulct of remorse and error ; the impression of her enchantments and of her sorrows wore off ; and he returned with renewed tenderness to Euthanasia, whom he had wronged ; and,

in the knowledge that he had shamed her pure lessons, he felt a true and wholesome sorrow, which was itself virtue. Yet he dared not go back to her ; he dared not meet her clear, calm eye ; and he felt that his cheek would burn with shame under her innocent gaze. He suddenly remembered his engagement to visit Pepi, the old Ghibeline politician, who, without honesty or humanity, snuffed up the air of self-conceit, and who, thus inflated, believed himself entitled to cover others with the venom of sarcasm and contempt. (Shelley 156-157 強調加筆)

カストルッチオは、ベアトリーチェはすぐに陽気さを取り戻すだろうと楽観する。しかし、彼女はその後出奔し、3年間監禁されたうえで暴行され、変わり果てた姿で再びカストルッチオのもとに現れる。

驚くべきことに、その時カストルッチオは、かつての恋人ユーサネイジアにすべてを打ち明けて、狂気に陥ったベアトリーチェを看病させる。カストルッチオは目前に現れる自らの過ちから目をそむけて、ユーサネイジアに預けてしまうことで、自省し成長を遂げることを避ける。内省を欠く主人公の気持ちは、読者には計り知れぬまま、物語は進行する。ユーサネイジアが亡くなった際のカストルッチオの心境も、読者には知らされない。その時のカストルッチオの心境について、語り手は「わからない」と述べるのみである。

なぜ語り手にはカストルッチオの心情が分からないのかという理由は、「結論」と題された物語とは離れた部分において、ぶっきらぼうに記されている。すでに述べたように、シェリーの『ヴァルパーガ』は歴史であるという言い分とは裏腹に、私的な記録に依拠して語り手が語っているのであり、その記録はユーサネイジアの死で終わっているのだ。そういう理由で、ユーサネイジアより長生きしたカストルッチオのその後については、語り手は「わからない」と述べるにとどまるのだ。以下が語り手の言葉である。

The private chronicles, from which the foregoing relation has been collected, end with the death of Euthanasia. It is therefore in public histories alone that we find an account of the last years of the life of Castruccio. We can know nothing of his grief when he found that she whom had once tenderly loved, and whom he had ever revered as the best and wisest among his friends, had died. We know however that, during the two years that he survived this event, his glory and power arose not only higher than they had ever before done, but that they surpassed those of any former Italian prince. (Shelley 323)

上記の引用において、語り手は、カストルッチオの晩年を知りたければ、歴史に目を向けるようにと述べている。その一方で、歴史から我々が知ることができるのは、カストルッチオがそれまでのどのイタリアの君主をも凌ぐ権力を手にしたことのみであり、彼の内面を知ることはできないと指摘し、歴史的な記述の限界を指摘している。これは、歴史記述から個人の内面が疎外されていることを示唆しているのだといえる。

上記では、私的な記録と公的な歴史が対置されており、個人の内面を伝えることのできない歴史に対する批判的な意見を読み取ることができる。私的な記録とは反対に、歴史はカストルッチオの感情については何も語らず、その業績を伝えるのみだ。それ故、強情にもユーサネイジアを死に追いやったカストルッチオが何を感じたのか、権力の掌握が幸福をもたらすのかという読者の疑問は置き去りにされる。またカストルッチオの後悔の念を聞くことによって、女性たちの不幸な物語に見合う結末を願う読者の期待も裏切られる。これらはすべて歴史しか参照枠がないためである。つまり、『ヴァルパーガ』の読書経験を通じて読者が抱く、理不尽なカストルッチオの行動に対する不満は、歴史というジャンルが持つ一つの欠陥への批判とみなすことができるのだ。

このような意見は、シェリーの父親であるゴドウィンが、エッセイ「歴史とロマンスについて」(Of History and Romance 未完成稿 1988年初版)で示し

ている歴史批判と類似している。以下の引用でゴドウィン<sup>1</sup>は、読者が人生で活用すべき道徳的意見を、歴史が提供することはできないと述べている。

General history will furnish us precedents in abundance, will show us how that which happened in one country has been repeated in another, and may perhaps even instruct us how that which has occurred in the annals of mankind, may under similar circumstances be produced again. But, if the energy of our minds should lead us to aspire to something more animated and noble than dull repetition, if we love the happiness of mankind enough to feel ourselves impelled to explore new and untrodden paths, we must then not rest contented with considering society in a mass, but must analyse the materials of which it is composed. It will be necessary for us to scrutinise the nature of man, before we can pronounce what it is of which social man is capable. Laying aside the generalities of historical abstraction, we must mark the operation of human passions ; must observe the empire of motives whether grovelling or elevated ; and must note the influence that one human being exercises over another, and the ascendancy of the daring and the wise over the vulgar multitude. It is thus, and thus only, that we shall be enabled to add, to the knowledge of the past, a sagacity that can penetrate into the depths of futurity.

(Godwin 362-63 強調加筆)

ロマンスに対して歴史の有用性を重視する一般論に対して、シェリーは上記のような父親の意見に賛成し、歴史と比較して、人物の内面をより詳細に描写するロマンスの重要性を主張しているのではないだろうか。

## 現実／歴史批判として機能するロマンスと女性達

ゴドウィンに倣って、歴史とロマンスの対立において、『ヴァルパーガ』ではロマンスに重要さが付与されていることを前節で確認した。それでは、歴史的な事実よりも重要性を付与されている内面を詳細に描写されている女性登場人物達について考察したい。

まずは、ベアトリーチェの物語に目を向けたい。彼女の物語は、結婚前に性的な関係を持つてはいけないという、伝統的な教訓を示している。カストルッチオと関係を持つ以前のベアトリーチェは、神意をつかさどる巫女として政治的な力さえ持っていた。以下の引用部分では、フェラーラの軍事蜂起の決行が、ベアトリーチェの得る神託により決定されることが分かる場面である。ベアトリーチェは養母に対して言う。

Mother, I promised that tomorrow I would name the day for my sovereign's enterprize ; I feel the spirit coming fast upon me ; let this noble gentleman inform your revered brother, that tomorrow in the church of St Anna I shall speak to my countrymen, and in the midst of the people of Ferrara tell in veiled words the moment of their deliverance. (Shelley 129-130)

ベアトリーチェは、このような政治力をカストルッチオに対する愛情のために失う。彼女の力は、彼女の額に付けられた銀板に掘られた「Ancilla Dei」（ラテン語で「神に使える乙女」の意味）という言葉に示されている。

神の乙女であったはずのベアトリーチェは、カストルッチオにすべてを捧げると決心し、以下の部分では、巫女としての彼女の存在の象徴ともいえる額の銀板を外し、カストルッチオに与えると述べている。

She now approached ; and he said playfully ; 'Where is thy mark, prophetess ?

art thou no longer the *Maiden of God*? For some days thou hast cast aside the hallowed diadem.’

‘I still have it,’ she replied; ‘but I have dismissed it from my brow; I will give it you; come, my lord, this evening at midnight to the secret entrance of the viscountess’s palace.’ Saying these words, she fled to hide her burning blushes in solitude, and again to feel the intoxicating delusions that led her on to destruction. (Shelley 151 イタリアス原文)

ベアトリーチェは、神意によりカストルッチオと結ばれたと信じるが、カストルッチオは、ユーサネイジアを愛していることを告げて、去ってしまう。それが原因で、彼女はそれまで妄信していた神と自分の関係について疑念を抱き、かつて自分が起こした奇跡の真相を養父に問う。以下がベアトリーチェと養父の会話である。ここでベアトリーチェは、自分の起こした奇跡が偽りであったという事実を知る。

‘You know that I loved Castruccio; how much I need hardly tell: I loved him beyond human love, for I thought heaven itself had interfered to unite us. I thought —— alas! it is with aching pain that I recollect my wild dreams, — that we two were chosen from the rest of the world, gifted with celestial faculties. It appeared to me to be a dispensation of Providence, that I should have met him at the full height of my glory, when I was burning with triumph and joy. I do not think, my own Euthanasia, that you can ever have experienced the vigour and fire of my sensations. Victory in an almost desperate struggle, success in art, love itself, are earthly feelings, subject to change and death; but, when these three most exquisite sensations are bestowed by the visible intervention of heaven, thus giving security to the unstable, and eternity to what is fleeting, such an event fills the over-brimming

cup, intoxicates the brain, and renders her who feels them more than mortal.

‘Victory and glory I had, and an assurance of divine inspiration ; the fame of what I was, was spread among the people of my country ; then love came, and flattered, and softened, and overcame me. Well, that I will pass over : to conceive that all I felt was human, common, and now faded, disgusts me, and makes me look back with horror to my lost paradise. Castruccio left me ; and I sat I cannot tell how long, white, immoveable, and intranced ; hours, I believe days, passed ; I cannot tell, for in truth I think I was mad. Yet I was silent ; not a word, not a tear, not a sound escaped me, until some one mentioned the name of Castruccio before me, and then I wept. I did not rave or weep aloud ; I crept about like a shadow, brooding over my own thoughts, and trying to divine the mystery of my destiny.

‘At length, I went to my good father, the bishop ; I knelt down before him : ‘Rise, dear child,’ he said ; ‘how pale you are ! what has quenched the fire of your brilliant eyes ?’

“‘Father, holy father,” I replied, ‘I will not rise till you answer me one question.’ — My looks were haggard with want of rest ; my tangled locks fell on my neck ; my glazed eyes could scarcely distinguish any object.

“‘My blessed Beatrice,” said the good old man, ‘you are much unlike yourself : but speak ; I know that you can ask nothing that I can refuse to tell.’

“‘Tell me then, by your hopes of heaven,” I cried, “‘whether fraud was used in the *Judgement of God* that I underwent, or how I escaped the fearful burning of the hot shares.’”

‘Tears started in my father’s eyes ; he rose, and embraced me, and, lifting me up, said with passion, — “Thank God! my prayers are fulfilled. Beatrice, you shall not be deceived, you will no longer deceive yourself ; and do not be unhappy, but joy that the deceit is removed from you, and that you may return

from your wild and feverish extacies to a true and real piety.”

““This is all well,” I replied calmly ; “but tell me truly how it happened.”

““That I cannot, my child, for I was myself kept in the dark ; I only know that fraud was most certainly practised for your deliverance. My child, we have all of us much erred ; you less than any ; for you have been deceived, led away by your feelings and imagination to believe yourself that which you are not.” (Shelley 251-52 強調加筆)

これまで起こしてきた奇跡が、実は偽りであったと知ったベアトリーチェは、家を飛び出して、さまようキャラクターとなる。結婚市場において価値を失った娘が社会的位置を喪失するという、慣習的な筋をよりドラマチックに仕立てたものだといえる。

ベアトリーチェの物語は、慣習的な筋書きを終えたところで、より革命的な側面を表す。彼女はいまや奇跡や予言が力を持つ空想世界から、現実世界へと引き戻された。ところがベアトリーチェが知る現実世界とは、地獄そのものである。ここでは、女性にとっての父権社会の現実に比べれば、小説に描かれる空想の恐怖など取るに足らないものだという、シェリーの母親メアリ・ウルストンクラフト (Mary Wollstonecraft 1759-1797) の意見の影響を見ることができる。ウルストンクラフトは、その小説『女性の虐待、あるいはマライア』において、以下のように述べている。小説の主人公マライアは、彼女の財産を奪おうとする夫の手によって、癲狂院に収監されている。

戦慄の住処はしばしば描写されてきた。魂を苦しめ、さまよえる精神を吸い込むために天才の呪文で呼び出された亡霊や怪物で満たされた城。しかし、この絶望に比べると、夢と同じもので織りなされている城がなんだというのだろう！ 館の片隅にマライアは座り、散乱した思いを呼び戻そうとしていた。(ウルストンクラフト 7)

上記では、作家の描く恐怖の物語ではなく、女性にとっては現実世界こそが、ゴシック的な恐怖と苦しみにあふれた場であると述べている。その言い分そのままに、『ヴァルパーガ』において、ベアトリーチェが経験する現実世界は、ことごとくゴシック的な恐怖世界との類似で描かれている。ウルストンクラフトの思想を受け継いだシェリーによる、皮肉の利いた社会批判といえる。

『ヴァルパーガ』の中でも最もゴシック色の強い部分は、マンドラゴーラと呼ばれる女性が登場する部分である。彼女は偽魔女で、カストルッチオが夜中に森で休息する習慣を利用して、ベアトリーチェを錯乱させ死に至らしめるのだ。マンドラゴーラは、カストルッチオに会えると言いくるめ、ベアトリーチェを夜中の森に連れ出す。その際ベアトリーチェには、あらかじめ狂気を引き起こすとされるヒヨスの毒を飲ませている。彼女の行う魔術とそこで引き起こされるベアトリーチェの狂気は詐欺である。マンドラゴーラの計画のすべてを目の当たりにする読者には、そのような超自然の力が存在しないことは明らかだ。

自分の行う神の奇跡が詐欺であったことを一度は自覚しながら、再びマンドラゴーラに欺かれるベアトリーチェは、非現実的な小説を読むことで誤った方向に導かれるとされる、主に女性のロマンス読者を体現するものとなる。ベアトリーチェは正気を取り戻すことなく、ユーサネイジアに看取られて死んでゆく。

ベアトリーチェはゴシック小説の持つ魔術、森、狂気など、当時の読者の興味をひく要素を小説に取り入れる登場人物である。さらに、ゴドウィンが教育的観点から観察されるべきだと主張する、人間の心理的側面を掘り下げることにも可能にし、さらにはウルストンクラフトが描いた、教育の欠如により徹底的に搾取される娘の姿も体現している。ベアトリーチェ個人は悲惨な最期を遂げる登場人物であるが、小説の内容に深みを与える重要な役を担っている。

聖女、巡礼、狂女と変化するベアトリーチェに対して、ユーサネイジアは常に変わらぬ良心を示す者である。父親はおらず、宗教的異端者であった母親を

早くに亡くしたベアトリーチェとは異なり、ユーサネイジアは賢明な父親に教育を受け、理性と信仰を基準にものごとを判断するように育った。それでもなお、女性の運命という観点では、ベアトリーチェとユーサネイジアは表裏一体をなしていると考えられる。ユーサネイジアの父親は、分別、もしくは情熱のどちらかが人生を左右すると、ユーサネイジアに伝えている (Shelley 93)。女性が情熱に身を任せた場合とその反対の典型として、ベアトリーチェとユーサネイジアの人生をそれぞれみなすことができる。『ヴァルパーガ』において特筆すべき点は、どちらの人生を選んでも、同じような結末を迎えることである。

ベアトリーチェ同様に、ユーサネイジアもウルストンクラフトの思想を反映するものであることは、カランも指摘している。彼は、「ユーサネイジア・デイ・アディマリはウルストンクラフトが彼女の著作を通じて、そして特に『女性の権利の擁護』において求めた理想を体現している」と述べており (Curran 113)、ダニエル・ホワイトも同意見を示している (Daniel E. White 82)。ユーサネイジアがウルストンクラフトの理想を担う登場人物であることは、ほぼ間違いないだろう。

ユーサネイジアは、皇帝派のカストルッチオと結婚することは、道義的に許されない立場へ自分を追い込むことを察する。二人は教皇派と皇帝派という敵対する党派にそれぞれ属していたので、カストルッチオと結婚することで、彼女の領民を彼の指揮下に置くことは、領民の意思に背くことになるからだ。彼女は自分の個人的な幸福よりも、領主としての責務を優先させる。そして、以下の引用部分に見られるように、カストルッチオとの結婚を断念する。

Her marriage with him, on condition of being a party in his victories over the Florentines, and rejoicing in the death of those she loved, would be as if she united herself to the rack, and bound herself for life, body and soul, to the ever renewing pangs of some tyrant-invented torture. It could not be: her resolution was made; and the energy of her soul qualified her to complete the

sacrifice. (Shelley 169-70)

カストルッチオに心を許すことで失うものを承知していなかったベアトリーチェとは反対に、ユーサネイジアは、結婚が彼女に迫る代償を十分に理解しているのだ。つまり、ユーサネイジアが領土に対して持つ権利を、カストルッチオが結婚という形で搾取しようとしていることを、彼女は敏感に察している。このようなユーサネイジアの認識は、内面性を覆い隠すことでその愛情を見せないカストルッチオのキャラクター形成と相まって、読者に彼女が優れた領主であると印象づける。

カストルッチオは、ユーサネイジアと政治的な理念を共有していないが、ユーサネイジアとは異なり、そのような理由で結婚を断念しない。以下の引用部分に見られるように、偽りの共感を示してまで、ユーサネイジアと結婚しようとしている。

Castruccio was a staunch Ghibeline, and his soul was set on the advancement of that party ; he did not sympathize with Euthanasia, but he appeared to do so, for he loved her, and listened, his eyes shining with pleasure, while she spoke in silver tones, and all appeared wise and good that came from her lips.

(Shelley 78 強調加筆)

このような二人の態度の相違は、結婚制度が権利について男女間の不平等を許していることから生ずるのである。つまり、結婚において、妻になったものの諸権利は、夫に帰属するのである。

ユーサネイジアは、結婚を拒否することはできても、カストルッチオによる軍事侵攻を防ぐことはできない。ユーサネイジアとの結婚でヴァルパーガを得ようという作戦に失敗したカストルッチオは、ヴァルパーガを軍事的に獲得する。立地上攻略の難しいヴァルパーガ城に攻め入る際に、事も有ろうに、カス

トルッチオはユーサネイジアとの思い出の秘密の通路を突破口に利用する。これはカストルッチオが、私的な情愛の思い出よりも、軍人として手腕を発揮することに価値を認める人物であることを示している。

また、この成り行きは、ユーサネイジアの理念は現実的な力を持っておらず、架空のものでしかない彼女の存在と同等であることを強調している。彼女の戦いは、非現実的で勝利の見込みのない、女性の反乱なのだ。このようなユーサネイジアの非現実的なまでの理想主義は、シェリーの夫パーシー・シェリーの理念にも通じている。ユーサネイジアとパーシー・シェリーの共通点については、ケイト・ファーガソン・エリス (Kate Ferguson Ellis) も指摘するところである。

Rather, Euthanasia, like Adrian and Perdita of Shelley's next novel, *The Last Man* (1826), shares Percy Shelley's fate of being simply too good to live, a resemblance underlined, as Shelley herself was aware, by the similarity of their death. (Ellis 156)

ユーサネイジアが依拠していると思われる二人の實在の人物であるウルストンクラフトとパーシー・シェリーは共に、社会改革に関して高い理想を掲げつつも、それを達成することはできなかった。

悪辣な暴君となるカストルッチオとは対照的に、ユーサネイジアは理想的な領主である。そして彼女は、暴君となったカストルッチオが、すっかり忘却するなにかである。以下は、成長したカストルッチオについての描写である。

He had in truth become a tyrant... Desire of dominion and lordship was the only passion that now had much power in his soul; he had forgotten Euthanasia; or if he remembered her, he called her a peevish girl, and wasted no further thought upon her. (Shelley 231-32 強調加筆)

ユーサネイジアを忘却した際に、カストルッチオが忘れ去ったもの、つまり失ったものについて、ユーサネイジアはより具体的に察している。以下の引用部分では、カストルッチオが失ったものは、ユーサネイジアが彼の中で愛していた部分であり、それらは慈悲、誠実さ、高貴な感情といったものであったとユーサネイジアが述べている。

“Beautiful creature,” she said, “once he told me that he loved you. Did he not? does he not? Why are you separated? do you not love him?”

“I did; once I did truly; but he has cast off that which was my love; and, like a flower plucked from the stalk, it has withered — as you see it.”

“Aye, that is strange. What did he cast off?”

“Why will you make me speak? He cast off humanity, honesty, honourable feeling, all that I prize.” (Shelley 250 強調加筆)

以上の点を総合すると、ユーサネイジアは、カストルッチオが暴君に成長する際に失わざるを得なかった、道徳的な部分の擬人化であると考えられるのではないだろうか。そうであれば、非道な暴君としてのカストルッチオは、ユーサネイジアの治めるヴァルパーガ城へ侵攻した際に、自らの良心を壊滅させたといえる。つまり、この小説は、歴史的な人物としてのカストルッチオが、自らの良心と相克する、内面葛藤の物語ともとれるのだ。

これは『ヴァルパーガ』の書名の構成にも見て取れる（『ヴァルパーガ、またはルッカの王子、カストルッチオの生涯』）。シェリーやその両親の手による小説群、『フランケンシュタイン、または現代のプロメテウス』、『世の中の現状、またはケイレブ・ウィリアムズ』、『女性の虐待、あるいはマライア』などにおいて、書名における用語の並置は、それぞれ互いを説明する相補的な関係にあることが多い。この様な視点から『ヴァルパーガ』の書名を見直すならば、ヴァルパーガというユーサネイジアの領地が、すなわち、カストルッチオが踏

みにじった彼自身の良心であると考えられるのだ。

物語上、カストルッチオから分離した彼の良心であるユーサネイジアは、常にカストルッチオの悪行に胸を痛める者である。その証に、以下の引用で語り手は、ユーサネイジアとカストルッチオは魂が結ばれているのだから、その絆は永遠に解かれることがないと述べている。

She had not been wedded to him by the church's rites ; but her soul, her thoughts, her fate, had been married to his ; she tried to loosen the chain that bound them eternally together, and felt that the effort was fruitless : if he were evil, she must weep ; if his light-hearted selfishness allowed no room for remorse in his own breast, humiliation and sorrow was doubly her portion, and this was her destiny for ever. (Shelley 232 強調加筆)

カストルッチオの胸中には悔恨の念が芽生える余地はなく、それはユーサネイジアの胸の中に巣かう運命なのだ。そして、カストルッチオの方でも、彼の罪を背負い苦しむユーサネイジアの役回りを承知している。以下の引用でカストルッチオは、自分の悪行が課す良心の痛みをユーサネイジアが受け入れること、そして、彼女の善性ゆえに、それが許されることを、まるで所与の条件のように語っている。

What do I ask of you ? And what right have I to bring upon you the burthen of my faults. But you are good, and will forgive me. (Shelley 241)

軍人として冷血な決断を下さねばならないカストルッチオが、自らの良心に許しを請う激しい内部葛藤が見え隠れする場面である。しかし、許されることを所与とし、物語上はユーサネイジアとして痛み悶える自分の良心を切り離すことで、カストルッチオは良心の呵責を逃れて、まれにみる権力を手に入れる

のだ。

上記のような、カストルッチオの歴史には記述されない内面、そしてユーサネイジアという別人格として彼から切り離された良心の痛みは、確かに存在したであろうというのが、シェリーが『ヴァルパーガ』をより正確な事実であると主張する根拠なのではないだろうか。そして、マキャベリの書きものに対して、『ヴァルパーガ』が真実に近いとするシェリーの主張は、歴史から疎外されている人物の内面を知ることを優先させ、それを描くことこそ有用であるという考えに基づいているのだ。

## 結 論

これまでに述べたように、『ヴァルパーガ』においては、歴史的記述であるカストルッチオの生き様と、そこで抑圧されざるを得なかった彼の良心の相克が描かれている。物語上、彼の内面の動きは、ユーサネイジアという別人格として登場していると考えられる。カストルッチオは物語の最終部分で、ユーサネイジアをナポリに追放する。ユーサネイジアはナポリに向けて出港した直後に、嵐の中で溺死する。カストルッチオがユーサネイジアを死に追いやった形である。

結末で、なぜカストルッチオとユーサネイジアは結ばれないのかと、読者は考えるかもしれない。ユーサネイジアの象徴する理想的ではあるが非現実的な領主像が、カストルッチオの描く冷酷な領主像と調和に向かう、つまり結婚することは、相反する者同士が止揚を迎える点で、理想的な結末のように思えるからだ。歴史とロマンスは、常に相容れないものなのだろうか。調和を避けるシェリーの意図を探りたい。

『ヴァルパーガ』における救いようのない結末は、ティロットターマ・ラーヤン (Tilottama Rajan) が「反事實的歴史」(counterfactual history) とよぶものを呼び込もうとするシェリーの策略と考えることはできないだろうか。「反事

的歴史」とは、ラーヤンが、「実際に現実となった歴史に代わって、現実になったかもしれない歴史」(Rajan 91)と定義するものである。ここでは、人生における道義的な側面の価値を認めユーサネイジアと結婚することで、カストルッチオが得たかもしれない人生を読者が想像することで生ずるものである。

ラーヤンと類似した、実現したかもしれない歴史性について、女性登場人物と絡めたうえでデイドラ・リンチ (Deidra Lynch) はこのように述べている。「シェリーはしばしば、虚構性を女性登場人物と関連付けている。その人物たちは、秘密裏にもしくは記録されない行為によって、歴史を実現するのだ。そうでなければ、過去に悲惨にも現実とはならなかった反事実のもつ可能性を主張しているのだ」(Lynch 145)。つまり、シェリーのテキストにおいて、歴史の記述からは疎外され、存在しなかったかのように虚構化される女性たちやその行動は、歴史が実現しえたための不可欠な要素であったのであり、実現しなかった歴史においては、起きたかもしれない事柄の可能性を主張するものなのだ。この実現しなかったが、ありえたかもしれない歴史を、読者の想像力によって呼び起こすのが、『ヴァルパーガ』におけるロマンス的な要素、つまり女性登場人物達の役割だといえる。

早くに両親を失ったカストルッチオは、少年時代にペツピという名の商人から、道徳的には悪い影響を受ける。カストルッチオは、完全にペツピの政治信条の隅々までを信奉するようになったので、欺きや殺人が敵の軍を弱らせるならば、それらはまっとうな手段であると考えようになったのだと、語り手は説明している (Shelley 192)。しかしペツピはカストルッチオが道端で偶然助けた者であり、彼の人生への関与は必然ではない。カストルッチオは父の死後すぐに、ギニーギという牧歌的な生活を営む好ましい人物のもとに身を寄せており、党派間の権力争いから身を引く機会もあった。このような、主人公の人生を左右する偶然性は、起こらなかった歴史について読者が思いを馳せる契機となる。そこで、もしも、カストルッチオがより良い父親像に導かれていたらという希望や、成長したカストルッチオがユーサネイジアと理想をともにした

夫となり素晴らしい君主となる可能性が、「反事実的歴史」として読者の内面に構築される。

しかし理想的な「反事実的歴史」は、あくまで可能性に留まり、カストルッチオの歴史はロマンス的な要素をことごとく破滅に導く。結末部でロマンスの要素が歴史の流れに調和してゆくスコットの小説に比べ、『ヴァルパーガ』は読者の共感を得にくいだろう。着想時から繰り返しスコットのウェイヴァリー小説を読んでいるシェリーは、意識的にスコットの小説との差異化を図ったといえる。ユーサネイジアとカストルッチオが互いに歩み寄るという、ありそうにもない結末を描くよりは、残念ながら生じなかった理想的な結末を、読者が自らの想像力で描くことを望んだのだろう。そうすることで、世の中の現状を伝える政治的意識を優先したのだ。

また、シェリーは、革命思想を受け継ぐ女性作家であり、幼少期から多くのスキャンダルの一部であった経緯から、スコットのように、以降歴史的な拡大を繰り広げる大英帝国へと連なるナショナル・アイデンティティーの形成と連動するような物語とは一線を画し、歴史の中で押しつぶされる犠牲者たちに目を向けることを選んだのだといえる。歴史小説の流行の影でひっそりと出版された『ヴァルパーガ』は、ゴシック小説、歴史小説、旅行記など当時の小説の主流を踏襲しつつも、歴史に描かれる勝者の陰にある犠牲者の姿を克明に描いている。そして、誰も幸福にはならない救いようのない筋骨きだが、ロマンスの持ちうる力を利用し、これまで耳を傾けられることになった歴史に声を与える試みであると評価できる。

## 注

1) シェリーが読んだスコットの書き物 ウェイバリー小説, その他

1815	Rokeby (詩) Lord of the Isles (詩) Guy Mannering (W 続編) Waverly	1819	Ivanhoe (W)
1816	Antiquary (W) Black Dwarf (W)	1820	Legend of Montrose (W) Bride of Lammermoor (W) Ivanhoe (W) Tales of my Landlord (W)
1817	Tales of My Landlord (W) Waverly Rob Roy (W)	1821	Abbot (W) Kenilworth (W) Ivanhoe (W) Waverley Antiquary (W) Rob Roy (W)
1818	Guy Mannering Rob Roy (W) &c. Black Dwarf (W)	1822	Pirate (W)

## 参 考 文 献

- Bennett, Betty T. and Stuart Curran, eds. *Mary Shelley in Her Times*. Baltimore and London : The Johns Hopkins UP, 2000.
- Birch, Diana, ed. *The Oxford Companion to English Literature*. 7<sup>th</sup> ed. Oxford : Oxford UP, 2009.
- Carson, James P. "'A Sigh of Many Hearts': History, Humanity, and Popular Culture in *Valperga*." Ed. Syndy M. Conger. Frederick S. Frank and Gregory O'dea. Madison, NJ : Fairleigh Dickinson UP, 1997. 167-192.
- Clemit, Pamela. *The Godwinian Novel: The Rational Fictions of Godwin, Brockden Brown, Mary Shelley*. Oxford : Clarendon P, 1993.
- Curran, Stuart. "*Valperga*." Schor 103-15.
- Ellis, Kate Ferguson. "*Falkner* and Other Fictions". Schor 151-62.
- Fisch, Audrey A., et al. Eds. *The Other Mary Shelley: Beyond Frankenstein*. Oxford : Oxford UP, 1993.
- Godwin, William. 'Of History and Romance.' Ed. Maurice Hindle. *Things as They Are or the Adventures of Caleb Williams*. Appendices IV. London : Penguin, 1988. 359-374.
- Handwerk, Gary. "History, Trauma, and the Limits of the Liberal Imagination : William Godwin's Historical Fiction." Rajan and Wright 64-85.

- Kelly, Gary. *English Fiction of the Romantic Period 1789-1830*. London : Longman, 1989.
- Lew, Jpseph W. "God's Sister : History and Ideology in *Valperga*."
- Lynch, Deidre. "Historical Novelist." Schor 135-50.
- O'Sullivan, Barbara Jane. "Beatrice in *Valperga* : A New Cassandra." Fisch 140-158.
- Rajan, Tilottama. "Between Romance and History : Possibility and Contingency in Godwin, Leibniz, and Mary Shelley's *Valperga*." Bennett 88-102.
- Rajan, Tilottama, and Julia M. Wright, eds. *Romanticism, History, and the Possibility of Genre*. Cambridge : Cambridge UP, 1998.
- Rossinton, Michael. "Future Uncertain : The Republican Tradition and its Destiny in *Valperga*." Bennett 103-118.
- . Introduction. *Valperga : or, the life and Adventures of Castruccio, Prince of Lucca*. Ed. Michael Rossington. Oxford : Oxford UP, 2000. ix-xxiv.
- Schor, Esther, ed. *Cambridge Companion to Mary Shelley*. Cambridge : Cambridge UP, 2003.
- Shelley, Mary. *Valperga : or, the Life and Adventures of Castruccio, Prince of Lucca*. 1823. Ed. Nora Croock. *The Novels and Selected Works of Mary Shelley*. Vol. 3. London : Pickering, 1996. 8 vols.
- White, Daniel E. Mary Shelley's *Valperga* : Italy and the Revision of Romantic Aesthetics. Ed. Michael Eberle-Sinatra. *Mary Shelley's Fictions : From Frankenstein to Falkner*. Basingstoke : Macmillan and NY : St. Martin's, 2000. 75-94.
- 阿部美春「メアリ・シェリーの『ヴァルパーガ』—ふたりの「ベアトリーチェ」聖女とファム・ファタール」現代英語文学研究会編『〈境界〉で読む英語文学 - ジェンダー・ナラティブ・人種・家族』東京 開文社 2005年 81-138頁
- 市川純「『ヴァルパーガ』における二人の女性—ロマンスにおけるロマンスの暴君批判」木村晶子編『メアリー・シェリー研究』東京 鳳書房 2009年 73-95頁
- ウルストンクラフト メアリ『女性の虐待,あるいはマライア』川津雅江訳 京都 アポロン社 1997年
- 金津和美「スコットランドへのピクチャレスク旅行—自然, 歴史, そして国家—」日本ジョーンソン協会編『十八世紀イギリス文学研究—躍動する言語表象』第3号 東京 開拓社 2006年 122-140頁
- 永井三明「『カストルッチョ・カストラカーニ伝』をめぐって」池田廉訳者代表『マキャヴェッリ全集1』解説 東京 筑摩書房 1998年 357-366頁
- マキャヴェッリ ニッコロ『カストルッチョ・カストラカーニ伝』服部文彦訳『マキャヴェッリ全集1』池田廉訳者代表 東京 開拓社 2006年 265-292頁

\*これは2011年度松山大学特別研究助成の成果である。